

五、私たちの村は、どんなふうにかわってきているか。

ことは、雨が多かったのに、かんじんの川上の方では、あまりふらなかったということで、川には電気をおこすだけのじゅうぶんな水がなく、秋もなかばをすぎたころから、ときどき電がおこるようになりました。こんやも、夕ごはんがすんだあと、みんなで、うらの山からとってきたくりのみを、おいしそうにたべていると、ぱっと電とうがきれてしまいました。おかあさんが、すばやく、ランプの用意をしていらっしやいます。



おじいさんが長いきせるですっているたばこの火だけが、ぼうつとあかるくみえます。廣くんとみちこさんは、つまずかないように、そおつとしよくたくをまわって、おじいさんのりようわきにすわりました。

「おじいさん、ぼく、エジソンが電きゅうをつくったという話をよみましたが、この村には、いつごろ電とうがともったのですか。」廣くんが、くらやみのなかで、おじいさんにききました。

「うん、電とうかね。電とうがついたのは、たいしてむかしのことではないよ。」おじいさんは、ちょうどこのとき、おかあさんのともしたランプの光できせるにたばこをつめながら、お答えになりました。

「考えてみると、ランプの光も、なかなかつかしいものだ。おじいさんがおまえたちぐらいのころには、このへんでは、こんなにくらいランプしかなかったのだからね。それが、だんだんべんりになってきて、とうとう電とうがつくようになった。この村に、はじめて電とうがともったのは、たしか三十年ぐらいまえのことだろうね。役場のげんかんにともしるといので、みんなおしかけていつてけんぶつしたものだったよ。この家についてのは、いつごろだったろうねえ、おとうさん。」



「私が十二、三のときだから、二十五、六年前になりますね。」おとうさんは、どまのくらがり、なにかしごとをしていらっしやるようです。「おしろの町に汽車が通るようになったのはいつごろですか。」こんどはみつこさんがしつもんしました。

「そうだ。あれは、おじいさんが十七、

八のときだ。だからもう五十年以上まえになるだろう。いよいよ汽車が通るといふ日には、村の人が、朝からべんとうをもって、ぞろぞろけんぶつにでかけたものだ。汽車といっても、そのときは、今のにくらべると、かたちも小さいし、たいして早くもなかったものだが、なにしろそのときには、みんなたいへんおどろいたものだよ。なん時間もなん時間もまったあげくにまっくろいけむりをはく汽車がいさましく走るのをみたときには、みんな思わず、ばんざいをさけんだね。汽車にのっていた人たちも、まどからはたをふっていた。あのときのきもちが、ちょっとわすれられないなあ。」「汽車が通るようになってから、村の人たちの生活は、どんどんべんりになってきたのでしょうか。」「いっそくたびに今のようになったのではないが、だんだんべんりになったのはだしかだね。」「おじいさん、どんなところがべんりになったのですか。くわしく話してください。」廣くんは、なかなかねっしんです。

「いや、そういわれても、ちょっとこまるね。べんりになったところは、かぞえきれないほどたくさんあるよ。まあ、氣のついたところから、すこしずつ話してみよう。」



このとき、きゆうに電どうがついて、あたりはひるまのようにあかるくなりました。みちこさんは、「やはり電どうは、あかるくてよい。」とおもいました。おじいさんは、にこにこしながら、話をつづけていらっやいます。

「汽車がとおるようになって、いちばんべんりになったのは、遠くの土地とゆききすることだろう。鉄道のおかげで、どれだけてがるに旅ができるようになったかわからない。それに、駅のある町まででるのにも、馬車がどんどん走らようになったし、道路もよくなってきたし、たいへんらくになったものだ。ブーブーふえをふきながら走っていく馬車なんかは、



廣やみちこに、ぜひみせたい氣がするね。ところで、遠くのとかいとゆききがらくになると、いろいろべんりなものが、たくさんはいつてくるようになる。ことに、外國でつくった品物は、はくらいといって、たいへんめずらしかったものだ。こんなふうだから、村にも、ぽとぽとお店ができるようになってきた。役場のあたりには、そのころから、村ではいちばん家のこみあったところだったね。」「役場のとなりに、ゆうびんきよくができたのも、だいぶまえ

のこになりますねえ。」おとうさんが、よこから、口をいれました。「いや、ゆうびんきよくは、たいして古くはないだろう。むかしは、あすこに、葉書や切手を賣る店があつて、のきたに、赤いはこのポストがぶらさがつていたものだ。おしろの町には、ずっとむかしからゆうびんきよくがあつたが、これは、鉄道が通る前からだよ。電ぼうがうてるようになったのは、だいぶんあとのことだがね。なにしろ、汽車が通ってからは、手紙なども、ずっと早くとどくようになったのは、大だすかりだった。」このとき、おかつてから、おかあさんの声が



しました。「みちこさん、あしたは、しんたいけんさがある日でしょう。おゆがわいていますから、早くおふろにはいりなさい。」みちこさんは、おかあさんにへんじをすると、おじいさんにちよつとことわつて、だいどころの方にとんでいきました。「この夏には、みんなチプスのよぼうちゅうしゃをしましたか、おじいさんのちいさいころにも、あんなちゅうしゃがあつたのですか。」「いやいや、よぼうちゅうしゃなどというものは、ついさいきんできたもの

だ。この村など、おじいさんのこどものころは、おいしゃさんがひとりもいなかったから、くすり賣りから買ったくすりのでまにあわないような病氣になると、はるばる町のびょういんまでいかなければならなかったくらいだ。おじいさんの、またおじいさんが生きていらつしゃつたころに、たいへんわるい病氣がはやったことがあるそうだが、そのときも、おいしゃさんはいないし、とうとう、村の人たちが、半分以上、その病氣にかかつて、ずいぶん死んだ人もでたという話だ。むかしは、でんせん病のことを、えき病といったのだが、これがはやりだと、わけがわからないので、ただおいのりばかりして、さいなんをのがれようと考えたものらしい、だから、今のようにゆきとどいたてあてをすればよくなるものを、どんどんおもくなるばかりだったのだ。」「廣のむしばも、早くてあてをしないとイケないね。」おとうさんが、ちゅういをなさいました。廣くんは、二、三にちまえから、すこしはがいたむのです。「おいしゃさんがいれば、病氣をしても、安心してられる。しかし、てあてをしてもよくならぬものもあるし、病氣にならないにこしたことはないだろう。おいしゃさんやほけんじよにも、病氣になってからごやっかいになるだけではなくて、ふだんからときどき、みていただく心がけがだいじだよ。いなかは、とかいより空氣がよくて、むねの病氣などはすくないということだったが、氣をつけない人が多いので、このごろはだいぶふえたという話だ。それに、かいちゅうなんかは、きつと町の人より多いだろう。廣のむしばも、はやくなおさないと、氣がつかないうちに、からだにこしょうができてくるよ。おじいさんも、わかいころに、もつとはをだいじにして

おけばよかったと思っている。なにしろ、そのころは、はがわるいといっても、おしろの町にだって、まだはいしやさんはなかったのだからね。」

おとうさんは、さっきから、電どうの下で、しきりにかきつけをみていらっやいます。おじいさんが、ちよつとせきを立たれたので、みちこさんは、こんどは、おとうさんにしつもんをはじめました。「おとうさん、それはなにのかきつけなの。」「これはね、土地をうりかいするやくそくのかきつけだよ。」おとうさんは、につこりわらって、たばこの火をつけながら、せつめいしてくださいました。「さいきん、新しいほうりつができたので、今までかりて、たがやしていた土地は、買って自分の土地にすることができるようになったのだよ。川むこうの山の畑は、むかしからよくせわをした土地だから、まえからほしいほしいと思っていたが、とうとうおとうさんの土地になった。これからは、一人でたくさんの土地をもつ人もなくなるし、自分は町にいて、いなかには田やはやけをもっているという人もいなくなるわけだ。」「村の人が、みんな自分の土地をもつんですね。」「そうだ、」だから、しんけんにはたらいてさえいれば、だんだんよいくらしができるようになるだろう。今までは、どんなにはたらいても、すこしもくらしがらくにならなかったのだからね。おとうさんがわかいころには、この村の人たちも、くらしにこまって、ほかの土地にはたらきにいつたり、なかには、とうとう村をはなれてしまったりする人も、ずいぶんにあった。とかいの工場にはたらきにでた人のうちには病氣になって、帰ってきた人も多かったようだ。そのころにくらべると、村のくらしも、ずいぶんらくになってきたものだ。」「せんそうのあいだは、人でがなくて、ずいぶんこまりましたよ。」

そのとき、ちょうどおかってのしごとをすませて、おへやにはいってこられたおかあさんが、おっしやいました。「おとうさんがせんそうから帰るまで、おかあさんはたいへんだったなあ。しかし、せんそうでは、もっともつときのどくな、ふしあわせな人が、村にもたくさんできたねえ。」



「おとうさん、話はちがいますが、きょういくいいんおせんきよというのはなんですか。学校のまえに、ポスターがありました。」廣くんが、とつぜん、おとうさんにたずねました。「きょういくいいんのせんきよかね。」あれは、この縣で、よくもののわかつたりっぱな人を七人えらんで、その人たちにきょういくのやりかたをよく考えてもらおうというのだ。だから、

とてもたいせつなせんきよだよ。せんきよは、今までにもたびたびあったから、もうようすがわかっているだろうが、せんそうのあとになってやっと、女の人

も男の人と同じように、せんきよのしかくができたのだ。女の人だって、きょう
いくいいんにでも、國會ぎいんにでも、なんにでもなれるんだ。もかしにくらべ
ると、すっかりかわったねえ。村長さんを、村の人みんなのせんきよでえらぶ



ようになったのも、ついさいきんおこと
で、それまでは、村会のひとだけでき
めていたのだから。」「でも、そんな
たいせつなせんきよのしかくをもってい
ながら、とうきょうにいかなかったり、自
分でよく考えずに、人のいうとおりにと
うひょうしたりする人があるのは、おしい
ことです。」おかあさんは、ほんとうにざ
んねんそうにおっしゃいます。そのと
き、おじいさんが、へやにもどってい
らっしゃったので、話はまた、むかしばな
しになりました。「このあいだ、旅行をし

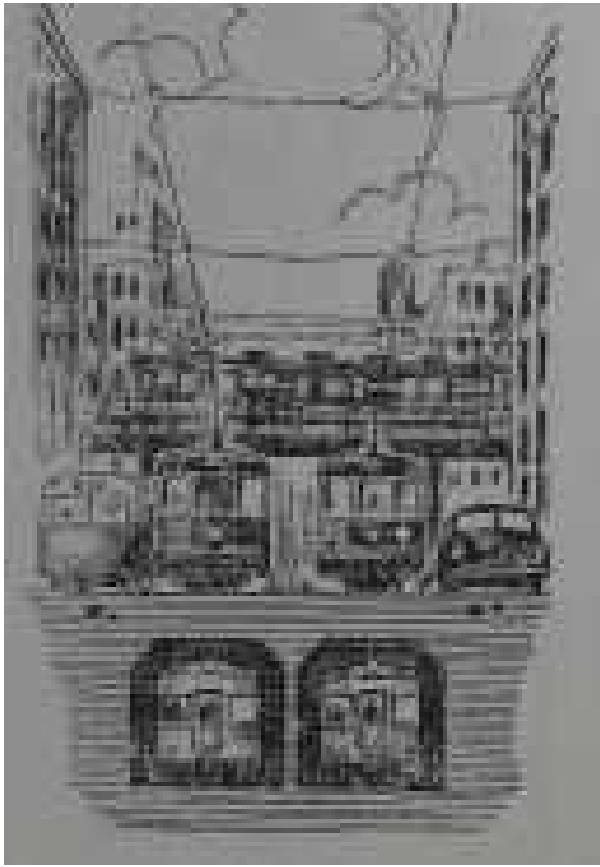
たとき、色のついたえいがをみたが、たいしたものができる世の中になった
な。そうそう、テレビジョンとかいうものも、きつと近いうちに、どんどん使わ
れるようになるにちがいない。むかしにくらべると、ずいぶんたのしみもふえた
ものだよ。おじいさんのわかったころには、えいがもなければ、ラジオもな
い。こんなへんぴな村には、旅のしばいもやってはこないし、せいぜい、年
に一回のおまつりに、みんなでおどったいするぐらいが、たのしみだったよ。



「はいへやの多いなかの家。
このような家を見て、どんな
ことを考えますか。」

それでも、ときどき町までいけるようにな
ってから、町のお店でほしい物を
買ったり、ちよつとしたしばいごやには
いったりすることもできるようになったが
ね。今は、バスにさえのれば、かんた
んに町までいけるし、また町なんかに
でかけなくても、やきゅうをやったり、
学校でえいがをみたり、てがるにたの
しめるからべんりになったよ。」「おじい
さん、べんりだというけれど、きよねん
の冬みたいに、てい電ばかりだと、か
えってふべんじゃないかしら。」廣くん
が、そうだったので、みんながわらい
だしました。おとうさんも、わらいなが
ら、「そうだ、。まだまだふべんなこと
が多いね。大水がでるとこまるし、そ

うかといっただいじなときに雨が降らなくてもこまる。つゆにころに、まえの川があふれだして、土手がきれそうになったときは、みんなあわてたなあ。どんなに雨が降っても、あんな心配をしないですむように、まえから用意しておかなければいけないのだ。大水ばかりじゃない。ちよつと村の生活をながめてみても、よくしなければいけないところが、たくさんあるからね。」とおっしゃいます。「家のたてかたなんかも、むかしのままで、ふべんなところが多いでしょう。くらいへやがたくさんあるし……」おかあさんも、なかなかいけんをもっていられつやるようです。「たべるものだって、もっと考えた方が飯井って、ラジオでいっていたわ。」みちこさんも、まけずにいます。廣くんは、エジソンの発明の話を思い出しました。



「エジソンみたいに、大発明をやれば、きっとみんなの生活がよくなるよ。」

「うん。そのとおりだ。みんなが、どうしたらもっとうまくいくだろうと、いつもくふうをするようにすれば、きっとよい生活ができるようになる。だが、それだけでは、まだたりないね。みんなが力をあわせて、助けあわなくてはだめだ。一けんの家でも、みんながきもちよく、力をあわせていなければ、きっと失敗する。」

いなかでは、まだ古いしきたりがつよくて、ほかの土地からきた人をのけものにしたり、むやみに人の家のうわさをしてみたり、今までそうしたからというので、むだなかねを使ってみたり、

まだ男が女にいはっているし、わけのわからないめいしんを信じているひともあるし、いろいろなおさなければならぬところがある。こういうことを、みんなが幸福になるというような日はなかなかこないだろう。」おとうさんのお話がとぎれると、庭でなく虫の声が、いちだんとよくきこえます。